１　令和８年度　校内研究テーマ

自ら学びに向かう 自立した学習者の育成
～　個別最適な学びと協働的な学びの一体化を通して　～

２　テーマ設定の理由

近年、社会を取り巻く環境は急速に変化しており、将来を担う子供たちにはその社会の変化に対応し、主体的に学び、考え、行動できる力が必要とされている。

児童一人一人にその力を身に付けさせるためにも、本県では令和７～９年度の期間中の学力向上推進施策として、「自立した学習者」育成プロジェクトを推進することになった。県施策では、学びの質を高める授業改善と、自ら学びを進めることができる「自立した学習者」を 育成することを核とした方針となった。

そのため本校でも、本県の学力向上推進施策を踏襲しつつ、これまでの校内研修で培ってきた ICT を活用した授業を基盤として、①個別最適な学び②協働的な学びを通して、更なる授業改善を目的に令和７年度から本テーマの設定に至り、研究を続けている。

令和７年度の成果・課題は以下のようである。

成果	①個別最適な学びについて ・自分の学びに応じてタブレットやノートを用いて学び方を選べることで学習意欲の向上につながった。 ・毎回の授業のスタイルを自身で選ぶことで、児童が自分の学習の現在地を自覚し、納得感を持って課題に取り組む姿が見られた。 ・分からないことは自分で調べようとする習慣が身に付いた。 ・目的と相手がいることを意識させながら、個々の興味や関心に応じた活動をすることができた。 ②協働的な学びについて ・教え合いの姿勢が身に付き、学習内容を深めることができた。 ・児童同士の関わりが増えたことで授業の活性化が図られた。 ・自分の考えをまとめた上で、相手に分かるように伝え、ペア→グループ→全体の順で、学びを深めることができた。 ・個々が納得して導き出した多様な考えを共有し合うことで、自分とは異なる視点から学びを広げようとする、質を伴った協働的な学びの姿へと繋がっている。 ・ICT を使った学習では、他の児童の考えを閲覧することができるので、自らの考えの見直し・再構築へとつなげている姿が見られた。
課題	①個別最適な学びについて ・上位層、下位層、中間層の児童に合った教材の準備や授業構想に時間がかかり教員の負担増になるため毎日の授業で取り入れることが難しい。 ・自分の最適な学び・方法を選ぶことが難しい児童がいる。児童によって取り組み方に差がある。 ・児童個々の学び方をしているため、単元テストや一律の基準だけでは、その子の「プロセ

	ス」や「自立性」を適切に評価しづらい。 ②協働的な学びについて ・各自が自分の学びに応じて、好きなツール（ICT、ノート等）を選んで没頭するあまり、教室が単なる「個習の場」になり、他者との関わりが希薄になってしまうことがある。 ・学習方法を個々に選ばせることで、サクサク進む子と、何を選べばいいか分からず手が止まる子の差がある。 ・協働的な学びの話合いについていけていない児童へのフォローと全体を見るバランスが不十分だった。

これらの成果と課題を踏まえ、更に発展・拡充させるためにも令和８年度も引き続き本テーマを設定し、研究・実践に取り組むこととした。（本テーマは令和７年度～令和９年度まで継続とする。）

３　「自ら学びに向かう自立した学習者」の定義

「自ら学びに向かう」とは既習の知識や経験をもとに、自ら課題を見つけ、学び、考え、主体的に判断しよりよく解決する能力のことである。また、「自立した学習者」とは目的や状況に応じて、自分に合った学び方を工夫したり、学習意欲を自ら引き出したりして学習できるような児童のことであり、急速に変化する社会を生きるためにも重要な力である。

４　「自立した学習者」育成を支える４つのポイント

「自立した育成者」を育成するためには、児童一人ひとりの学びと成長を支援し、心理的安全性のある４つのポイント「自己存在感の感受」「共感的な人間関係の育成」「自己決定の場の提供」「安全・安心な風土の醸成」の学習環境を整えることも重要であり、「指示的風土の醸成」活かした授業づくりも意識して心がけていく必要がある。

５　「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」とは

「個別最適な学び」とは「指導の個別化」と「学習者の個性化」に分けられ教師か支援の必要な児童により重点的な指導を行うことで効果的な指導を実現することや児童一人一人の特性や学習進度、学習到達度に応じ、指導方法・教材や学習時間の柔軟な提供・設定を行うことなど「指導の個別化」が必要である。また、幼児期からのさまざまな場を通じての体験活動から得た児童の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探求において課題の設定、情報の収集、整理・分析まとめ表現を行う等、教師が児童一人一人に応じた活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、児童自身の学習が最適になるよう調整する「学習の個性化」が必要になってくる。

（図１　寺子屋朝日-朝日新聞「個別最適な学び」と「協働的な学び」）

また、「協働的な学び」とは多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的変化を乗り越え持続可能な社会の作り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成することが必要である。

多様な児童達が埋もれることなく一人ひとりのよい点や可能性が見い出され、あらゆる他者と協働しながら持続可能な社会の作り手となることができるよう、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」の充実が必要であると考える。

6　研究仮説

〇学習基盤としての ICT を活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に行うことにより、自ら学びに向かう態度を身に付けた「自立した学習者」を育成することができるであろう。

7　研究目標

「自ら学びに向かう学習者の児童」を育成する学習指導の在り方を、児童の実態や各教科の特性に応じた目指す学びの姿は、以下の通りである。

〇低学年では．．．自分の学力、興味関心に基づき、自分に合った学習方法を選択できる児童。
〇中学年では．．．自分に合う学び方を見つけ、自分の考えをもち、友達と関わりながら学ぼうとする児童
〇高学年では．．．多様な解法やツール（模型・ICT など）を互いに参照し合い、自分とは異なる視点から学びを捉え直し、自分の考えを再構築しようとすることに積極的な児童。

8　研究の視点

「自ら学びに向かう自立した学習者の育成」のために、次の視点を授業改善の重点として実践研究とする。

視点①　学習基盤としての ICT の活用
視点②「個別最適な学び」と「協働的な学び」一体化
視点③学習状況を評価し、改善に生かす PDCA サイクルの授業展開

９　研究内容

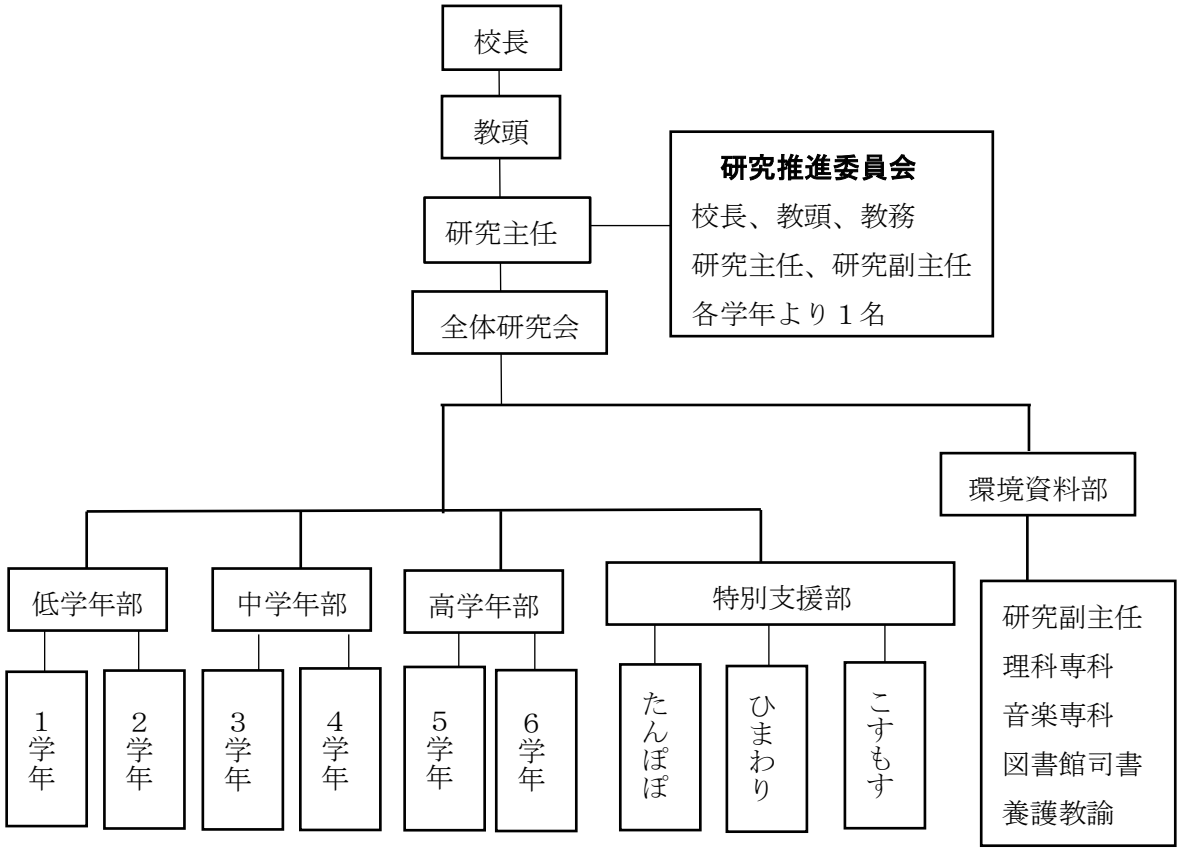
（１）　自ら学びに向かう自立した学習者の育成のための授業改善

ア「自ら学びに向かう自立した学習者の育成」についての理論研修
イ「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」の授業実践研修
ウ　ICT 活用を生かした学びの充実
エ 授業形態の工夫

１０　研究方針

（１） 研究については、全職員の共通理解のもとに推進する。
（２） 授業の工夫改善を通して、自分の考えをもち、学び合う態度を育てるように努める。
（３） 全体研究は共通理解の場とし計画に応じて講師を招聘し「自ら学びに向かう自立した学習者の育成」についての研修を深める。R８年度は教科総合訪問(必須)
（４）研究テーマに迫っていくために、学習指導法の理論や指導過程の研究を深める。
（５）各教科等の特性に応じた「ICT 活用」「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」の教材選定・実施に向けた理論研修に努める。
（６）研究時間の確保の為、毎月第２木曜日を校内研修日に位置づける。
（７）授業研究会は原則として、金曜日の５校時に位置づける。
（８）研究授業の教科は原則として学年で統一し、研究を進める。
（９）研究会の持ち方を工夫し、自主的に研究会をもつ。また、検証方法に基づいて、研究の成果・課題をまとめる。
(10) 指導案の様式について。代表授業は細案、一人一授業、隣学年研は略案（プランシート）としアンケートを含めた学校全体で統一した指導案を使用する。
(11) 実践後は、修正した指導案と成果と課題をまとめ、ワークシートや写真等の記録を保存する。

１１　研究の組織



研究推進委員会の役割

ア，研究の全体計画（研究の方向付け）
イ，日程調整(各学年の日程調整)
ウ，研究紀要の編集等全体的な研究推進に関わること
エ，その他関連すること

部会の役割

ア，理論研究
イ，隣学年で指導案を作成、検討
ウ，研究授業の実施
エ，授業を参観、反省、評価
オ，研究紀要の編集

全体研究会（全職員の役割）

ア，授業研究会を主として理論を含めて研究を深める。
イ，研究の方法や推進について共通理解を図る。
ウ，各学年からの課題を検討し研究活動の進化を図る。

環境資料部の役割

ア，研修に関わる環境の整備
イ，資料の整理・収集を図る。
ウ，アンケート調査の集計・分析
エ，人材リストの作成

１２　研究の全体構想

【教育実践テーマ】　― 笑顔の登校　満足の下校 ―
夢や希望を育み、心豊かにたくましく生きる「ぐすくっ子」の育成

【めざす教師像】
使命感：情熱、自覚と責任
実践力：わかる授業、楽習、修養
指導力：児童理解、師弟同行

学校教育目標
○進んで学習する子
○心豊かで思いやりのある子
○最後までやり抜く子

【期待する保護者像】
・「生きる力」の基礎となるしつけのできる保護者
・生活リズム（早寝・早起き・朝ご飯・家庭学習等）を大切にし，気力・体力を育てる保護者
・個性や能力を見つけ伸ばす保護者

【本校児童に身に付けてほしい力】
・学びに向かう力
・考えて動く力
・協働する力

学習指導要領改訂の背景・方向性
【背景】
・学習内容だけではなく、資質・能力の育成が重要
【方向性】
・何を学ぶか（内容）
・どのように学ぶか（方法）
・何ができるようになるのか（評

○知識・技能
○思考力・判断力・表現力
○学びに向かう力・人間性

沖縄県学力向上推進
（令和７～９年度）
「自立した学習者」育成プロジェクト

児童との関係づくり
○生徒指導４機能と児童理解に基づく指導
○児童の居場所づくり・活躍の場づくり

【研究主題】
「自ら学びに向かう　自立した学習者の育成」
～個別最適な学びと協働的な学びの一体化を通して～

【研究仮説】
○学習基盤としての ICT を活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に行うことにより、自ら学びに向かう態度を身に付けた「自立した学習者」を育成することができるであろう。

めざす授業像の共有
・「問い」が生まれる授業
・「主体的・対話的で深い学び」のある授業
・学ぶ意欲を高める指導の工夫
・地域人材，専門家を活用した授業の工夫
・コミュニケーション能力の育成
・授業公開と確かな教材研究（一人一授業）
・授業の開始・終了時刻の厳守，授業開始前の立腰と黙想の実施
・「Mタイム」の充実
・専門性の向上（一研究）

研究の視点
視点①　学習基盤としての ICT の活用
視点②「個別最適な学び」と「協働的な学びの一体化」
視点③学習状況を評価し、改善に生かす PDCA サイクルの授業展開

研究内容・方法

【基礎研究】
・「自ら学びに向かう自立した学習者の育成」についての理論研修
・「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」の授業実践研修
・ICT 活用を生かした学びの充実
　授業形態の工夫

【授業研究】
・学年協働体制による教材研究と指導案づくり
・共通実践の取り組み
・代表授業と全員授業（一人一授業）の実施
・授業研究会の充実
・実践を通した授業分析と改善

玉小ルール（学習規律・生活規律）の共通実践と徹底